

ラウンドテーブル グループB-2: 教え方

(文責: 齊木美紀)

グループ B-2 では、まず参加者各人の置かれている立場から、現在抱えている問題を出し合ってもらった。

1) 抱えている問題点

1-1) 日本語教育関係者が困っていること

- ① 教材は何を使えばいいか
- ② 介護の専門知識をどのように扱えばいいか
- ③ 介護を目指す学生と他の分野を目指す学生との違いは何か
- ④ ヘルパー2級の資格を取ったが、日本語教師として専門知識をどこまで教えればいいのか
- ⑤ 日本語教師養成講座に、介護に特化した養成講座はないか

1-2) 介護施設 EPA 担当者および介護専門学校の担当者が困っていること

- ① 今年度ベトナムからの EPA 介護福祉士候補者の受け入れを予定しているが、どのような日本語講師を雇えばいいか
- ② 施設内で N1 レベルの学習者と N2 レベルの学習者は一緒に勉強できるか
- ③ 介護専門学校に入学した外国人は、日本人と同じ授業が理解できるのか

1-3) その他全般

- ① 現在、家族がお世話になっている施設では、職員不足で毎日奔走している。日本語レベルを問わず、早急に人材確保を考える必要があるのではないか。
- ② 学会、研究会、EPA の制度についての情報がほしい。

グループ B-2 には、介護に関わる日本語教育未経験者が多かったため、生活相談員（介護福祉士）として仕事をなさっている方から介護現場の現状について情報提供をしていただき、その後、グループで話し合い、解決策を模索した。

2) 介護現場の現状

- 介護現場では人間関係が重要である。技術があっても良い人間関係が構築できずに離職してしまう人が多い。外国人・日本人を問わず、日本語力や技術よりも「適応力」が求められている。
- 介護福祉士国家試験関連のニュースでは、「褥瘡」などの漢字語彙が取りざたされるが、現場では PC 入力が主流のため、漢字を書かなければならない場面はほとんどない。

- EPA 介護福祉士候補者の中には、国家試験合格を目指している者と、3年間働いて安定した収入が得られればよいと割り切っている者とが混在している。EPA の場合、全員、国家試験を受験することが義務づけられているため、指導が難しい。
- EPA 介護福祉士候補者は国家試験受験までの3年間は離職しないため、安定した人材確保になると考えている施設もある。
- 施設側は、「人材育成」を考える必要があるにもかかわらず、気付いていない。
- EPA 介護福祉士候補者の日本語教育を、施設内の日本人職員に頼っている施設もあるが、専門学校先生に教えてもらうほうが効果的である。
- 外国人介護職員（EPA 介護福祉士候補者、定住外国人）に対する日本語教育には地域差が生じており、学習者にとって機会均等ではない。

3) 教え方に関する解決策

3-1) 日本語教育の現状

- 日本語学校の就学生、EPA 介護福祉士候補者、定住外国人など、介護職を目指す学習者は多種多様で、キャリアパスも異なる。
- 受入施設の所在地や予算により、学習者に提供できる日本語授業の質が異なる。
- 異業種間の連携（ネットワーク）が求められるが時間を要する。

3-2) 解決策

教材は、全国共通で汎用性のある国家試験対策から開始する。試験問題を分析することにより、対象者に合わせた教材が作成できる。

教える際は、下記の項目に留意する必要がある。

- ① 専門語彙を増やす。
- ② 国家試験問題が理解できるような文法力をつける。
- ③ ディクテーション、運筆の練習をすることにより現場での即戦力を養う。

4) その他参加者からの感想

- 現場の実情を知らなかったなので、詳細が聞けて良かった。
- 介護コース経験者の話がもう少し聞けると良かった。

以上